

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 26 号

発行日
2024. 4. 30
編集・発行
井上講四／堂本彰夫
※連絡先
〒901-2225
沖縄県宜野湾市
大謝名 3-13-24
教育協働研究所
～岳陽舎～
(井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail:
gakuyou17@outlook.jp

○「架橋」ー教育とは、まさにそれである!!

昨日(27日)から、今年のGWが始まったが、私にとつては、残念ながら毎日がそれなので(笑)、取り立てて気にするようなことではない!そんな中、いつものネット記事に、『学校は本来の役割を忘れてしまった』日本の学校が子どもにとつて、しんどい場所 になってしまった根本原因』というものがあつた!私も気になっていたことなので、どうということが書いてあるのかと、具体的に見てみた。

その記事は、内田樹著『だからあれほど言ったのに』(マガジンハウス新書の一部を再編集したものとあつたが、「学校は何のためにあるのか」ということで、同書では、「今の学校は子どもたちを格付けする評価機関のようなところになっている。それは本来の学校教育の目的ではない。子どもというものは『なんだかよくわからないもの』であるということから始めるべきなのだ」と指摘しているという。

「中世以来、子どもは七歳までは『異界』とつながる『聖なる存在』だが、その年齢を過ぎると、そのつながりが切れてしまう。アドレッセンス(※思春期)の終わりというのは『異界とのつながり』が切れてしまう年齢に達したというところ:そうやって人間は『聖なるもの』から『俗なるもの』になる。だから、『この世ならざるもの』とこの世を架橋するものには童名を付けるという習慣がある。:彼らはこの世の秩序には従わない存在である。:」

この後も興味を湧く話が続くのであるが、要は、子どもは、そういう存在であるから、そのことを踏まえ対応すべきである!それが、「架橋」ということである!!まったくその通りであろう!ただし、橋自体を渡るのは本人である!

○卒業生に、面白い先生(小学校教師)がいる!

ところで、その「なんだかよくわからないもの(聖なるもの?)」としての「子ども」に対して、私からすると、とても面白い対応をしているように思える先生がいる!卒業生のN君であるが、先日久しぶりに、我が岳陽舎を訪ねて来てくれた!今回もまた、自分の学校(小学校)の児童のことを話してくれたが(ただし、個人情報流出には当たらない!笑、毎回、彼と子ども達とのやり取りを、ある種の話芸のように再現してくれるのである!)

ここでは、そのリアリティを伝えることは出来ないが、ふと思うのは、彼自身が、ここで言う「架橋」となっているのではないかということである(多分自覚はないであろうが!!近年は、保護者や同僚との関係もなかなか難しいものとなっているが、他ならぬ子ども達との関係自体も変わってきている!要は、深く踏み込めない?そういう意識やスタンスが、他ならぬ「教師と子どもの関係」にまで及んでしまっているということである!

彼は、おそらくそうしたことは、基本的には分かっているが、目の前にいる「この子だけには」、何とか自分の出来ることはしたい!そう思っているのではないのか?だが、そうは言っても、意に反する結果が生まれる場合もある?その辺りのことは、ある意味紙一重なのであろうが、結果的には、その子(達)に受け入れられているように見えるので(保護者からも)、頑張つて欲しいと、改めて思う次第である!とにかく、そうした「架橋」が出来なくなれば、教師のやりがいは半減する(今般の「働き方改革」!どうも現状では?でももある!!)!!

○何が、どう崩れているのか?「そ」が見えていなければ!!
という(こ)で、(こ)では(こ)といふようであるが、この「架橋」について、もう少し書き加えておきたい!先の記事によれば、「学校は子どもを『聖なるもの』から『この世』に誘導する装置(今では六芸のうち『書』と『数』だけしか教えなくなった。これは子どもたちを最初から『こちらの世界』のフルメンバーとして遇することである。:それは違う?学校は子どもたちを『こちらの世界』から『こちらの世界』へそつと移動させる、きわめてデリケートな作業を求める場:半ば野生の存在である子どもたちを文明化していくというプロセスは『アドレッセンスとの決別』を子どもたちに強いること:しばしば彼らは学校に通うことそれ自体で激しい痛みを経験する。」。

そして、「かつての日本人は、子どもは壊れやすいもの、傷つきやすいものだ」と知っていたので、丁寧に扱った。異界にまだ半身を残している『聖なるもの』だと知っていたので、子どもを『敬する』仕方をわかまえていた。それはもう現代社会の常識ではない。それでも、直感にすぐれた教師たちは、学校教育が子どもたちにとって外傷的経験になるリスクを感知して、子どもたちを傷つけないことを優先的に配慮している。けれども、そのような配慮が人類的な深い意味を持つことを理解している人は教育行政の要路にはたぶん一人もいない。:」。

さらに、『学校が本来の役割を忘れてしまった』ことよりも、保護者や社会が『学校に学校の役割以外のものを求めた』ことのほうが問題(学校は本来は学びの場:教師が一方的に教えるだけではなく、子ども自身で考えることが学校の役割:しかし、保護者は自分の子供の嫌まで学校に求め:子どもがスパーで万引きすると店長は保護者ではなく学校へ連絡:高校生が詐欺に遭うと有識者が『学校で消費者教育をすべきだ』と、何でもかんでも学校の役割となり、その多くは子どもにとって面白くないことなので、学校嫌いが進み:教員も余裕がなくなつて、テストの結果を次の指導に生かすところまで行かず、ただ、採点して評価するだけ。:」。

とまあそういうことであるが、改めての課題は、それをいかに是正すればよいかである!ある意味正当な状況説明は出尽くしている?だから、その解決方法が問われるのである!(井上)

○「社会」の二つの形である国(家)ではあるが?!

さて、捉えようによつては、表の記事と同根の話題となるが、再度、ここに来て、まさしく古くて新しい(だから永遠の?)テーマである、「社会と国(家)」の関係(違い?)について考えてみたい!要は、「社会」の一形態であるはずの「国(家)」ではあるが、その内実が変わってきている?否、そこにおける両者の関係(違い?)が、ますますその懸隔を広げている?だから、改めて、そのことを考えてみる必要がある?そういうことである?!

ということ、とにかく、今ほど、ここで言う「社会と国(家)の関係(違い?)」を考えさせる時はないであろう!すなわち、そこには、戦争とか、重大な国家間関係があつても、一方では、それに対する為政者の体たらく・専断があり、他方では、それについての国民の無関心・諦めがあるということであるが、誇張して言えば、折角の社会システムが存亡の危機にあるということである!!何が言いたいのかというと、実は、その危機は、揺るぎない社会の一つであるとされてきた「国(家)」そのものあり様から、もたらされているということである!

何故なら、「国(家)」というものは、「社会」と、ある意味では同じであるが、その機関や対外関係においては、それ自体が、その社会とは異なつた存在となる!だから、「国民」は、その成り行きに直接関与出来ない!さらには、その関与の手段が、事実上閉ざされているならば、それは、自国のためとか、民主主義とか言われても、肝心の、「社会」という体を成していないということにもなる(ただし、小社会は無数にある)!!

しかるに、もちろん、今のところ、その危機は、特定の人物(独裁者?)、政党からもたらされたものとは言えるが、事の本質は、おそらくそこにはない!!「国(家)」というものの自体に、その芽がある!だが、だからと言って、それを失くすことは出来ない!ならば、その関係自体を正当にしていける他ない!それが、「社会」でもある!

○改めて、PTA問題は、現代社会の縮図でもある?!

ここに、例のPTA問題に関わつて、面白いコメントがある!「こういうのは、5年10年と経過しなきゃ分らないことだと思ふけどね...さて、コミュニティスクールはどうなつてんだろね?」。つまり、そこに、「コミュニティスクール」の視野があるのかどうかであるが、まったくの同感である!「PTAは必要。そういう組織がしつかりして事が学校運営や地域社会の安定に繋がつてる。」「本当に子どもや先生の目線から必要な『親』や『地域』のあべき活動を語つてほしい。」ともある!

だが、一方では、その存在自体の是非(不要論も含めて)を問うことは、今まさに必要なことではない!ただし、それは、ことPTAだけの問題ではない!これまでに創り上げられてきた、ある意味あらゆる組織・団体に言えることなのである!お互いの人間関係や働き方、そこにある価値観やルールそれ自体を改めて見直し、そこから新たなあり方を構築すべき時なのである!だから、PTA問題は、現代社会の縮図でもあるということなのである!!

〈短歌に託して見失つた!大切なものを!〉

・「架橋」! 教育とは、まさにそれ!

だが今は、そうなつていない!!

・それが本当の教師!! 知識や体験を与えるだけなら

AIの方が上手!!

・何が、どう崩れているのか?

そこを見極めなければ、混乱は続く?!

・人類に、今突きつけられているのは

社会のあり方! つまり国のあり様!

一度は必要であつた、その是非論!

ただし壊すだけなら、誰でも出来る?!

〈特別コーナー〉堂本彰夫の古代史旅枕 ②〇〇

○古代日向国の実像を求めて―その2―
ある意味よんなことから、古代日向国の実像を探つてみたいと思ひ始めた私であるが、考えてみたら、その暴挙?には、それなりの必然性があるようにも思われる?というのも、「記紀」に示されている「天孫降臨」や「日向三代」、そして、「神武東征」の物語はもちろんであるが(日向自身)が、その物語の地(まほろば)の「八咫鳥」こと「タケツツミ命」の出身もそこ、先号で述べた「宮崎神宮/皇宮神社」や「生目古墳群」、さらには「西都原古墳群」、そして、それらの地に群在する「地下式横穴墓群」等が、かの北部九州(とりわけ「高良山」周辺)と、近畿・大和周辺の状況の双方に、色濃く関わっているように思われるからである!

何とも奇妙で(つまり説明困難?)、その事実をどのように受け止めればよいのか?素人の私には、とても手に負えるものではないが、ただ、ここで今一つだけ突破できるのではないかと思ひ始めているのが、その地域の出身と目される「日下部氏」(※多様な表記がある!)の存在である(一説によると、「土の中から出現したとも?」)!すなわち、同氏は、先の北部九州(とりわけ「高良山」周辺)と、近畿・大和周辺の双方に顔を見せているのである!例えば、前者では「高良大社」の「大祝」として、後者では「仁徳天皇」と日向出身の妃「鬚長姫」の子「大草香皇子」といった真合である!ちなみに、その「鬚長姫」の父親が、現在も同地に残っている「諸眞(もろまこと)の名を負う「諸眞君(牟諸君)」である!

もちろん、それらが、どの程度の真実かは分かり様もないが、この「日下部氏」(「阿蘇氏」、そして、それに関わる、神武の大和での長子「神八井其命」の後裔の「多氏」とも関係?)が、この奇妙な関係を説明してくれるのではないかと、今一つある!また、それに関わつては、かの「景行天皇」の熊襲征討?話も、絶対に関わつてくる(他ならぬ「諸眞君(牟諸君)」は、彼の孫とも?)!とにかく、改めてこれからである! (つづく) (堂本)

〈編集後記〉今年のGWも、早前半が終わつた!明日からは5月である!どんな日々が待っているか?ちなみに、10日には、例の馴染みの卒業生グループが訪問する!そして、ズーム交流も、二つある!やはり生身の交流・出合いは、元気が出る!!沖縄は、もう既に梅雨となつている(ただし、今日は、珍しく晴れ!薄曇り?)!!ユリが綺麗である! (井上/堂本)